



図画工作の大切さ！これからの世の中で、とても大切な力を育む教科です！

今回の学校便りでは、小学校での各教科の大切さについて考えてみます。はじめに、誤解の多い図画工作から深掘りします。図画工作＝絵や版画というイメージ、コンクールへの出品、個人で作品を仕上げるというイメージ？

1「結果」から「プロセス」という本来の評価へ

一般的な図工は、大人が決めた基準で「上手・下手」を評価し、コンクールで賞を取るような「見栄えの良い作品」を作らせることが目的化しています。しかし、図工の本質は、将来アーティストを育てることではなく、**「正解のない問いに対して、自分なりの答えを創り出す力」**を育てることにあります。

本来の姿：作品の出来栄えという「結果」ではなく、子どもがどう試行錯誤したかという「プロセス」に光を当て、一人ひとりの異なる表現を認めることで自己肯定感を育む場です。

2「制作」だけでなく「造形遊び」も大切な学習内容

単に絵を描いたり彫刻を作ったりする技術習得は、図工の一側面でしかありません。学習指導要領でも重視されている「造形遊び」こそが、図工の動的な本質を表しているともいえます。

本来の姿：「モノ」を残すことではなく、材料や環境と関わりながら、自分だけの価値や美しさを見つける「経験」そのものが主役です。感覚や直感を出発点にし、手を動かしながらその場で発想を広げていく探究のプロセスが、子どもたちの主体性を引き出します。

3「鑑賞」による多様な価値観の受容

かつての鑑賞は有名な画家の作品を眺めることが中心でしたが、本来の鑑賞教育はより社会的な広がりを持っています。

本来の姿：友達の作品や身近なデザイン、自然の美しさに触れることで、**自分とは異なる表現を尊重する「多様性の受容」を学びます。また、感じたことを言語化するプロセスは、論理的思考やクリティカル・シンキングの土台となります。

まとめ：本来の図工が育むもの

図工教育が「本来の姿」へ移行することは、子どもたちが予測困難な未来を生き抜くための「エンジン」「表したい思い」を主役に据えることで、感性や創造的思考力が育まれていきます。

これからの図工：「上手さ」ではなく「生きる力」を育む

現代の図工教育は、コンクールで評価されるような「見栄えの良い作品」を作るのではなく、試行錯誤のプロセスを通じて「正解のない問いに立ち向かう力」を育てる場へと進化しています。

教育の転換：結果至上主義からの脱却

- 「上手・下手」の評価から「プロセス」の重視へ



- 「図工嫌い」をなくし、主体性を引き出す

正解を求めるのではなく、一人ひとりの異なる表現を認めることで表現の委縮を防ぎます。



	従来の図工 (コンクール主義)
主な目的	技術の向上、 美しい作品づくり
	教師や大人の基準 (上手・下手)

	これからの図工 (資質・能力の育成)
主な目的	思考力、判断力、 表現力の育成
評価基準	子どもの主体性、 表したい思い

未来を生き抜く力：造形遊びと鑑賞

- 造形遊び：材料との対話が生む「探究心」

ゴールを決めず、手と言葉を動かしながら自分だけの価値を見つける経験です。



- 鑑賞：多様性を受け入れる「視覚的素養」

他者の作品を認めることで尊重する心を育み、物事を多角的に見る力を養います。



正解のない問いに「自分なりの答え」を創る力

予測困難な未来を生き抜くための、感性と創造的思考力のエンジンを育てます。

